

能代中学・能代高校硬式野球部 小史

I 草創の頃から戦後まで

美しい桜並木に囲まれた樽子山に野球部が創設されたのは昭和4年と言われる。初代校長である武藤健三郎先生は選手制度を認めず、体育講習としてスポーツを奨励した。旧制四高2年に在学中の平川民治氏（秋田中、四高、京都大）は武藤校長に招聘されて野球部を創設した。

それは能中の1期生が5年生の時であった。平川氏は後に講師として招かれ、後に初代監督になった。四高時代は投手として甲子園に出場した方で、能中野球部のパイオニア的存在の方でもあった。

本校が全国中等学校野球選手権大会・秋田大会に出場したのは昭和7年である。県内から12校が参加。1回戦角館中学と対戦したが初陣を飾ることは出来なかった。

昭和15年は3年計画の仕上げの年であった。内外から甲子園出場の期待の声が高かった。チームは期待通り秋田県大会で活躍し奥羽大会（戦前最後の大会）に初めて出場した。甲子園へと大きな夢を描かせてくれたが、奥羽大会1回戦、五所川原農林に延長11回逆転されて4-5で惜敗した。この試合の終了時間は午後7時3分であったという。もちろんナイターの設備などなかった時代である。バッテリーは鈴木音安-杉原茂であった。

草創期からの監督であった平川民治氏はこの試合を最後にひとたび辞任し伊藤廉氏コーチ（昭和8年卒-4期生）がその後を引き継いだ。

戦時体制が深まるにつれて野球部廃止の学校が続出し、本校野球部も17年11月13日の対能代商業戦をもって終止符を打った。投手は佐々木満（19年卒-15期）で、戦後初代のキャプテンの池井安昌（22年卒-18期）が1年生であった。広いグラウンドは食糧事情悪化を理由に鍬が打ち込まれ

れ畠と化した。

昭和16年から20年の5年間野球競技は中止され幾多の選手が涙をのんだ。昭和21年の早春、杉原茂（16年卒-12期生）は校内に檄文を掲示して野球部復活の狼煙をあげた。その後部員が多数集まり、グラウンドも次第に整備された。夏の秋田県大会には戦前よりも多くの学校が参加した。球児たちの闘魂は決して衰えてはいなかったのである。

II 昭和20年代～40年代

グラウンドには部員の倍以上もの先輩が姿を現しては、物心両面にわたって援助した。昭和21年7月21日の北羽新報は次のように報じている。

「第28回（復活第1回）中等学校野球大会が7月21日から秋田八橋球場で開催が決定される。能中チームは勝永旅館に合宿。先輩達は4,000円程の合宿費を分担拠出して応援した。また、父兄やファンから副食費や援助米の申し込みがあり、能代中学は野球一色に塗られたかの観を呈している。」

昭和23年から鈴木音安氏（16年卒-12期）が監督に就任された。学制改革により校名も「能代南」となる。1年投手本庄文三（26年卒-21期）等の活躍で代表決定戦まで勝ち進んだが、秋田南高（現秋田高）に敗れた。

学校スポーツが盛んになるにつれて各高校とも経費の捻出に四苦八苦。そこで能工、本校同窓会が基金募集のためにOB戦を開催して母校野球部に応援した。野球王国能代らしい話題である。ちなみに入場料は20円であった。

昭和30年11月22日の北羽新報には松陵会（能高硬式野球部OB会）が能代一中、二中の校長に選手を市外（秋田市等）に出さないように依頼したという記事が掲載されていた。秋田勢が能代の

有望選手をスカウトすることに苦言を示したものである。

この頃、高校野球の低迷にくらべ、少年野球（中学）は黄金時代を現出していた。一、二中の名選手が秋田高、本荘高に流出した。その頃、監督も鈴木音安氏（16年卒－12期）、相澤東一氏（11年卒－7期）、松谷儀朗氏（27年卒－22期）と度々交代し混迷していた。

昭和31年 野球王国能代を示す大会が開催された。それは、能代と弘前両市の第1回高校野球リーグ戦である。遠来の弘前チーム（東奥義塾、弘前工業、弘前高校）は3校とも能代勢に歯がたたず、2勝校の能代工業と本校の決戦となり、能代工業を破って優勝した。本校のバッテリーは江坂勝彦－佐々木隆であった。

昭和35年は野球部にとって画期的な年であった。野球部の再興の輿望を担い、佐藤憲一郎松陵会長（7年卒－3期）、小笠原恒太郎部長（13年卒－9期）、牛丸幸也氏（23年卒－19期 後に本校体育後援会会长）の奔走で太田久氏（30年卒－25期）を迎えることができた。太田氏は卒業後明治大学に進学。精神野球の権化、島岡監督の薰陶を受け、卒業後スポーツ記者として『野球界』に入社していたのを、佐藤憲一郎氏が自分の会社に採用した。仕事は一切させず、監督業を勉強させて支援したという。こんな先輩がおったことを卒業生として誇りに思う。

III 甲子園初出場

昭和38年 秋田県代表決定戦、9回裏大曲農、第1打者三振、第2打者投ゴロでツーアウト、第3打者細谷、白球が金属性の快音を発して炎天のライトへ舞い上がる。「ウワー」という歓声の渦の中で岩井聰が捕った。全ナインがマウンドの簾内に駆け寄る。太田監督の体が宙に舞う。夢にまでみた甲子園初出場の瞬間である。

菊谷良己主将のもとにしっかりと抱かれた優勝旗。「勇者は還りぬ」の旋律が炎天下の八橋球場に流れる。苦闘の涙がとめどなくナインの、監督

のユニフォームを濡らした。高鳴る勝ちどきを告げる歓呼の嵐は、能中、能高野球部の苦闘史を奏でるようでもあった。

昭和38年 第45回甲子園大会

1回戦 能代12－1長浜北

2回戦 能代1－5岡山東商

朝日新聞東京本社運動部の須崎記者は8月15日付けの朝日新聞に「堅実な基本技に好感」と題して次の文章を載せている。

能代高はさぞかし残念だったと思う。エース簾内が1回戦対長浜北戦で肩を痛めるという思わぬ事故があったからだ。ナインは痛み止めの注射をしながら健闘する簾内をよく助け、田村進中堅手の美技をはじめ、内野陣もしばしば難ゴロを処理して岡山の激しい攻撃を必死に食い止めた。

完敗したとはいえ、決して悲観することはない。むしろ初出場とは思えぬほど欠点の少ないチームに見えた。鳥越投手のような技巧型の投手とはあまり試合をしていなかったから打者がとまどっていたのではないだろうか。この敗戦がいい教訓になったと思う。いずれにしろ今後に希望が持てるチームだ。来年に期待したい。

IV 東北大会初優勝、国体にも出場

昭和39年国体予選を兼ねた第11回東北大会春季大会で優勝し、初めて東北の覇者となる。東京オリンピックのため6月実施となった新潟国体では1回戦東邦高校を3－2で降したが2回戦博多工業に0－2で惜敗した。この年の西奥羽代表決定戦で秋田工業に2－3で敗れた。2年連続の甲子園出場は秋田勢に阻まれた。

昭和41年 山田投手（釜石製鉄→阪急→中日コーチ→中日監督→野球評論家）を擁しながら県代表決定戦で敗退した。昭和43年全県選抜で優勝し東北大会へ出場したが夏の大会では秋田市立高に敗れた。

低迷し続けたが昭和50年、右の本格派投手鈴木誠の踏ん張りで全県選抜大会で7年ぶりに優勝した。東北大会では準優勝し甲子園への期待がふ

くらんだが秋田地区代表決定戦で秋田商業に敗れた。昭和51年秋田地区代表決定戦で秋田高の小林投手（能代二中出身）に抑えられ、延長11回スクイズを決められサヨウナラ負けを喫した。

V 高塙移転 甲子園連続出場

昭和50年 東北大会で準優勝したが、秋田地区代表決定戦で秋田商業に9-13のスコアで敗れる。51年は夏の大会も秋田地区代表決定戦で、秋田高に2-3で惜敗する。秋田勢に今一步のところで涙を飲む試合が続いた。

昭和52年 全県大会優勝。東北大会準優勝。秋田県大会では秋田工業を破って奥羽大会の出場権を獲得した。奥羽大会代表決定戦は秋田商に2-1で勝ち優勝。2回目の甲子園出場権を手中に収めた。

第59回全国大会1回戦 能代2-10高崎商

好村三郎元朝日新聞東京本社運動部長は「高松の奮起を望む」と題して、朝日新聞に次の文章を載せている。

「……2死から2本塁打を含む5安打が連続した。それでもベンチは高松を代えようとしない。多くの人々は非情な監督と思ったであろうが、あえて続投させる太田監督の心情は投手の経験を持つ筆者にはわかる。彼は来年を期して高松に続投させることによって高松の奮起を願っていたに相違ない。投手は打たれることによって反省し、努力することによって成長するものである。この苦しい試練を太田監督はあえて高松に与えたといってよい。これから練習次第では必ず『秋田に左腕高松あり』と中央球界では高く評価されるだろう」。

昭和53年 全県選抜2連覇、5度目の優勝。東北大会準優勝。この53年の60回大会から1県1代表制となり、甲子園がより近くなる。決勝戦は本荘高の工藤と高松の投手戦だったが、3-2で2年連続の栄冠をかちとる。

第60回全国大会 第1試合 能代0-1箕島 スポーツニッポンは1面トップ見出しに「敗れ

てもNo.1」甲子園タメ息…稻妻直球。優勝候補・箕島に惜敗」と記し高松の投球フォームを大写している。そして「東北一の剛球投手。その看板に偽りはなかった。…ハンディを背負ってからの投球がこの男の真骨頂だ。箕島の強打に少しもひるんだところがない。左足を大きく擧げる巨人・西本ぱり。古いファンにはあの沢村(京都商一巨人)を左にしたようなダイナミックな投球でゲイゲイとねじ伏せていた。…夢物語に終わった甲子園2勝目。しかし高松を中心としたすがすがしいプレーは甲子園ファンに強烈な印象を残していった」。

また8月11日の読売新聞には巨人軍一塁手王貞治（現ソフトバンク監督）の観戦記として「…能代ー箕島戦を見て20余年前の自分の姿を思い出した。実際にその投球を見てウーン、なるほどと感心した。右足を高々とあげるフォームはダイナミックで、うちの西本を左にしたような感じだった。最近の高校野球は変化球に頼る投手が多いだけに、スピード豊かなストレートでぐいぐい押すピッチングは見ていてスカッとした。まだまだ粗けずりだが、その将来が楽しみだ」と述懐している。

高松投手は日本高校選手権選抜チームのメンバーにも選ばれ、韓国に遠征して2試合に登板し、故津田（広島カープ）等とともに活躍した。

甲子園での一こまで今も眼前に焼きついている場面がある。牛丸幸也氏（23年卒-19期）が浴衣に下駄を履いて山田久志氏（阪急のピッチャー）と三塁側で楽しそうに語らっている光景である。泰然自若、意気揚々とした面持ちであった。その後山田投手は三塁手にグランドの癖を伝授し、ボールの処理について丁寧に指導していた。先輩の「力」に感服した場面であった。

甲子園出場を祝って牛丸幸也氏はユニフォーム50着を寄贈してくれた。本校の試合ではいつもバックネット裏にいた。また、自宅に野球部員を寄宿させて応援してくれた。体育後援会長、能代市教育委員会委員長も務めた。

昭和50年頃から本校硬式野球部が強くなったのには大きな理由がある。その一つに、浅内で診

療所を営む菅原忠幸氏の絶大なる支援である。この支援は浅内出身の本校野球部員が菅原先生に痛み止めの注射をうつてもらいに通院することから始まったようである。それは昭和45、6年の頃であった。以来、陰に陽にご支援くださった。秋田県内でピッティングマシンを本校が最初に導入できたのも菅原氏の寄贈によるものである。県外に合宿する時もキャンプに行く時もマシンを車に積んでいったという。

高塙の野球場にはダンプで数百台の土が入っている。練習試合に来る他校の監督や部員、父兄会が感嘆するほどの球場である。その球場も菅原先生の「力」に負うものである。テニスコートや軟式球場にも土を入れてくださった。体育後援会会長として本校の競技スポーツ向上発展に尽力されたお方でもある。

また大会には部員と同宿し、部員の健康管理面を一手にお世話してくださった。お医者さんが側にいることで、部員にとっては誠に心強かったに違いない。

昭和55年 夏の甲子園大会に3回、東北大会に7回出場させた太田監督が4月1日付けで北教育事務所山本出張所に異動、20年間にわたる監督生活にピリオドを打つことになった。太田監督在任中の戦績には目をみはるものがある。常にベスト4以上であった。高校野球界の名物監督が姿を消すのは能代高校にとってもファンにとってもこの上なく寂しいものだった。

55年4月 本校教諭小林多樹也が監督に就任した。夏の大会決勝戦、超高校球の本格派投手として評判高い秋田商の高山（元西鉄ライオンズ）の好投に1-2で惜敗した。

昭和57年 菅野政喜青年監督（53年卒-48期）が就任し、全県選抜で秋田南を降し、4年ぶり6度目の全県制覇を成し遂げた。東北大会でも久慈工を6-2と破り、18年ぶり2度目の東北No.1となり、甲子園への夢をいだかせた。しかし、夏の大会3回戦で経法大付高に敗退し、東北No.1の力を發揮できずに終わってしまった。「球場には魔物が住んでいる」という言葉をこのときほど

思い知らされたことはない。

昭和59年 小林多樹也教諭が再び監督に就任した。夏の大会代表決定戦で金足農に5-6で軍門に降った。その時のピッチャーが現伊藤康夫監督である。

昭和62年 秋田高校時代に甲子園に出場経験のある尾形徳昭教諭（現在、御所野学院高）が監督に就任した。平成元年には春の全県選抜で7年ぶり7度目の優勝、東北大会で決勝戦、仙台育英に0-3で惜敗した。平成3年まで監督をつとめ、翌年の4回目の甲子園出場の礎をつくった。

VI 4度目の甲子園出場

平成元年 長年の懸案であった雨天体育館が完成した。竣工式で加賀正隆校長は「この雨天体育館は本校建学の精神である文武両道の一翼を担うことを願って建てたものである。雨天体育館が能代高校の名を天下に轟かせるための発射台となることを祈念する」と述べたが、今もってその気持ちに変わりはない。因みに総工費は約1億円であった。

平成4年 4月から納谷聰講師が監督に就任。就任直後からほとんど負け無しの快進撃。全県選抜で3年ぶり8回目の優勝。東北大会は仙台育英に敗れたが準優勝。全県大会は金足農を破り14年ぶり4回目の甲子園。監督就任4ヶ月で甲子園出場切符を獲得するという快挙を成し遂げる。秋田魁新報は次のように報じている。

「8年ぶりの頂上決戦は、能代が雪辱 第74回全国高校野球選手権秋田県大会決勝戦は、大接戦の末に能代に軍配があがった。能代は、猛打と成田の好投で試合を常にリード。金足農も持ち前の強打で3度同点に追いついた。しかし能代は8回、池端の適時二塁打で決勝点を挙げ、成田の力投で逃げ切った。9日間にわたる県内球児たちの熱いドラマは、名勝負で幕を閉じた。」

8月14日 1回戦 能代4-3佐賀東
10盗塁を許すなど苦しい戦いだったが、9回に逆転し甲子園で29年ぶりに勝利を挙げた。昭

和38年、初出場で長浜北（滋賀）相手に初白星を挙げたが、その時の会場は西宮球場だった。甲子園に初めて流れる校歌。O Bにどっても身震いする瞬間であった。

2回戦 能代0—7尽誠学園

百戦錬磨の尽誠学園にどう向かっていくのか期待されたが、守備の乱れなどで小刻みに追加点を許してしまった。打線も尽誠・渡辺投手に3安打に抑えられてしまった。監督の信条である「投手はより速く、打者はより遠く」ということばを今後も大切にしてほしいものだ。

平成4年の甲子園球場能代側の応援席に三氏の遺影が選手の活躍を見守っていた。平川民治氏（初代監督）、佐藤憲一郎氏（7年卒—3期、初代松陵会会长、昭和43年体育後援会会长）、相澤東一氏（11年卒—7期、数回にわたる監督、2代目松陵会会长）であった。高松以来14年振りの甲子園球場、球場を見つめる三氏の眼は潤んでいる

ように見受けられた。

平成8年 全県大会準々決勝 能代2—5金足農

金足農左腕エース工藤太一に12奪三振を喫し逆転負けに終わった。平成11年全県大会準決勝でまたしても金足農に敗退。

平成12年4月から柴田創一郎教諭（平成5年卒—63期）が監督に就任した。若さから部員にとってはなにかと話しやすい監督であった。部員を鍛えたが甲子園は遠かった。

平成17年 昭和59年金足農と対戦した投手、伊藤康夫（60年卒—55期）が教諭として着任。即監督に就任した。甲子園への道は秋田勢の壁を打ち碎くことだと今日もグランドで大きな声を出して鍛えている。

（文責・編集委員会）

